

高齢者の相互支援システムに関する研究

著者	友清 貴和, 古川 恵子, 雪丸 久徳
雑誌名	鹿児島大学工学部研究報告
巻	44
ページ	101-106
別言語のタイトル	A STUDY ON THE SYSTEM OF THE ELDERLY'S MUTUAL SUPPORT
URL	http://hdl.handle.net/10232/606

高齢者の相互支援システムに関する研究

著者	友清 貴和, 古川 恵子, 雪丸 久徳
雑誌名	鹿児島大学工学部研究報告
巻	44
ページ	101-106
別言語のタイトル	A STUDY ON THE SYSTEM OF THE ELDERLY'S MUTUAL SUPPORT
URL	http://hdl.handle.net/10232/00006256

高齢者の相互支援システムに関する研究

友清 貴和* 古川 恵子** 雪丸 久徳***

A STUDY ON THE SYSTEM OF THE ELDERLY'S MUTUAL SUPPORT

Takakazu TOMOKIYO, Keiko FURUKAWA and Hisanori YUKIMARU

The purpose of this study is to get the knowledge to verify that the elderly still have relationship with each other in the area and there are possibilities that the elderly will help each other from now on.

As a consequence, it became clear that in spite of a distance or ages, there are various relationships and various supports of life in the community. So we can expect that the people will support each other in the community from now on.

Keywords: The elderly, Supports of life, Community, Farm village

1. はじめに

高齢化が進む現在、親世帯と子世帯の同居率は低下し、単身高齢者世帯及び、夫婦のみで暮らす高齢者世帯の割合が大きくなっている。地方地域においては特に、過疎化と高齢化が進行し、高齢者人口が増加している。

高齢者が自らの意思により、可能な限り自立した生活を営むには、行政による公的支援は不可欠であるが、現状では十分とはいえない。施設ケアから在宅ケアへと福祉行政が変わる中、高齢者をとりまくコミュニティが重要な要素となってくる。また、一方、地域の高齢者の多くは定住年数も長く、生活基盤を居住地に持ち、心身が健康であるため、地域社会の一員として社会活動に参加し役割をもつことが可能である。とりわけ、健康な高齢者が、身体的、精神的な面から支援を必要とする高齢者と関わりを持つことが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、一連の研究^{注1)}・^{注3)}に引き続き、過疎化と高齢化が進行している地方地域の高齢者の相互支援システム構築の可能性を検証するための基礎的知見を得ようとしたものである。

これまでの研究結果より、高齢者のつきあいの広がりには集落の地形特性により異なること、精神的つきあいや物理的つきあいが複数の友人の年齢の広がりの中なかで多く行われていること、また、通院や買い物の外出行動における生活支援が、近所の同年代の高齢者や若い年代の人により行われていることが明らかになった。

本研究においては、高齢者の子どもとのかかわりと、近隣とのつきあいを分析軸として、支援の状況を把握し、高齢者の日常のつきあいの内容を分析し、さらに、地理的条件との関係から地方地域の高齢者の相互支援の要因を考察する。

ここでいうつきあいとは、主として「日常生活における私的で自発的なものをいい、強制されるものではない」と定義する。

2002年8月31日受理

* 建築学科

** 鹿児島女子短期大学

*** 博士前期課程建築学専攻

1. 市崎木場
2. 松木場
3. 高崎山
4. 谷山
5. 小崎
6. 魚路
7. 野間池



図1. 笠沙町調査対象集落配置

表1. 調査対象集落の概要

集落名	全人口(人)*	高齢化率(%) *	独居老人世帯 比率(%)*	調査対象世帯数 (世帯)
町全体	3,951	42.2	23.8	合計 92
市崎木場	57	52.6	20.0	15
松木場	74	62.2	37.8	17
高崎山	15	80.0	54.5	5
谷山	35	51.4	27.8	10
小崎	16	37.5	33.3	4
魚路	40	57.5	23.5	13
野間池	263	35.7	18.3	28

3. 研究の方法

本研究では、鹿児島県笠沙町を対象とし、前回調査（1999年）の6集落に加え、地形特性からも分析するために、平坦地である集落を1つ追加し、新たなヒアリング調査を行った。調査対象世帯は、6集落については前回と同じ世帯とした。

4. 調査概要

4-1. 調査方法

調査期間は平成13年9月の4日間。7集落の人々に対してヒアリング調査を実施し、8月と11月に事前、事後調査を行った。笠沙町対象集落配置を【図1】に示す。主な調査内容は、①高齢者の付き合いの相手とその内容、②緊急時の支援、③外出行動とそれに対する支援、④集落の人のつながり、⑤身体状況や施設利用、等である。

回答者数は92/117人、回答率は78.0%である。回答者は1世帯1人で、世帯主か配偶者である。回答者がいづれであっても世帯としてのつきあいに関連するものとする。

表2. 調査集落の地形分類と特徴

集落名	世帯数	地形	他集落との連続性	バス停からの距離 (m)
1 市崎木場	20	平坦地 急勾配	あり	1,670 2,300
2 松木場	37		あり	1,200 1,800
7 野間池	115		あり	40 410
5 小崎	9	小規模	なし	20 400
3 高崎山	11		なし	100 570
4 谷山	18	谷あい	なし	370 650
6 魚路	17	急勾配	なし	290 625

表3. 調査対象者の属性

調査項目	人(%)	調査項目	人(%)		
性別	男	27(29.3)	年齢	65歳以上~75歳未満	37(40.2)
	女	65(70.7)		75歳以上	48(52.2)
世帯類型	単身	33(35.9)	65歳未満	7(7.6)	
	夫婦のみ	29(31.5)	職業	無職	67(72.8)
	親子	23(25.0)		農業	15(16.3)
	世代	6(6.5)		漁業	2(2.2)
その他	1(1.1)	その他	6(6.5)		
(各項目合計92人)				無回答	2(2.2)

4-2. 調査の対象と概要

笠沙町は、人口3,951人、高齢化率42.2%（平成13年）、町内に農・山・漁村集落を抱え、高齢化、過疎化の進む町である。薩摩半島の西南端に位置し、周囲は東シナ海に面する典型的なリアス式海岸が続いている。調査対象集落は、1999年の調査集落に新たに野間池を追加し、市崎木場、松木場、高崎山、谷山、小崎、魚路の7集落とした。小崎と野間池が平坦地である以外は、傾斜地の集落である。市崎木場、松木場、高崎山、小崎、野間池は道路沿いに、谷山と魚路は、国道から300~400m入り込んだところに広がっている。回答者は、後期高齢者が半数を超え、また、単身世帯が全体の約36%を占めている。

【図1】【表1】【表2】【表3】

5. 調査結果と分析

5-1. 子どもとの関係

5-1-1. 同居子がいる高齢者

同居子がいる高齢者29人中、別居子もいる高齢者は26人いる。同居子がしてくれること（複数回答）は、「買い物」や「力仕事」、「車に乗せてくれる」、「薬をとってきてくれる」、「病院への付き添い」等で、別居子がしてくれることは、「家事の手伝い」、「車に乗せてくれる」、「買い物」等である。別居子と話をするときには、「盆・暮れ・正月」、「家に来てくれた時」、「ただ話をしたい時」等で、話す頻度

表4. 別居子がしてくれる内容（多い順）

順位	同居者がいる高齢者	単身高齢者
1	家事の手伝い	元気か声をかけたり・・・
2	車に乗せてくれる	車に乗せてくれる
3	買い物	相談したりされたり
4	元気か声をかけたり・・・	家事の手伝い
5	力仕事の手伝い	代わりに買い物

表5. 別居子全員と話す頻度

頻度	同居者がいる高齢者		単身高齢者	
	人数	割合	人数	割合
ほぼ毎日	5/26人	19.2%	8/27人	29.6%
週に1、2回	8/26人	30.8%	26/27人	96.3%
月に1、2回	20/26人	76.9%	34/27人	125.9%
その他	8/26人	30.8%	14/27人	51.9%

(※複数の別居子を持つ高齢者を含む)

表6. 緊急時に頼れる最も近い人の居住地

家族形態	集落内			町内	近隣	県内	その他	なし	合計
	隣	近所	その他						
単身世帯	8	15	2	1	2	2	1	2	33
夫婦世帯	5	12	0	4	2	1	1	5	30

(別居子全員について)は、「月に1、2回」が最も多く、「その他(たまに、1/2ヵ月、1/2年)」、「週に1、2回」、「ほぼ毎日」と続く。

5-1-2. 単身高齢者

単身高齢者33人中、子どもがいる高齢者は27人である。別居子がしてくれることは、多い順に、「元気か声をかけたり様子を見たり」、「車に乗せてくれる」、「相談したり、されたり」等である。

別居子と話をするときは、「ただ話をしたい時」が多く、「盆・暮れ・正月」、「相談事があるとき」と続く。話す頻度(別居子全員について)は、「月に1、2回」が最も多く、次いで「週に1、2回」である。【表4】【表5】

5-1-3. 緊急時に頼れる子どもが集落内に住んでいない単身高齢者

緊急時に頼れる人として子どもをあげている単身高齢者が10人いるが、集落内に居住していない子供が7人いる。高齢者の場合、緊急時の対応や支援が重要な課題である。【表6】

5-2. 近隣とのつきあい

緊急時に頼れる最も近い人の居住地が集落内であると答えている単身高齢者は、25/33人、夫婦世帯で17/30人である。緊急時に頼れる人として、集落内の人をあげなかった単身高齢者8人について、日常の

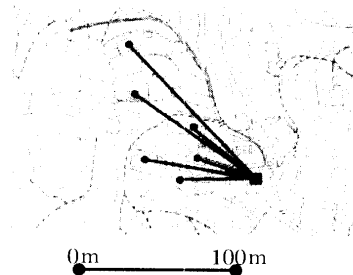


図2. 単身高齢者のつきあい(事例1)

67歳。作った花や野菜をあげたりもらったりしている。台風時には近くのひとり暮らしの人の家に避難した。 ※■印は、単身高齢者(回答者)、直線は、つきあいがあることを示す。

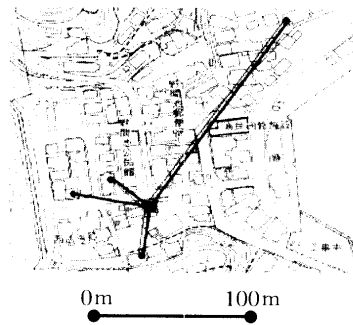


図3. 単身高齢者のつきあい(事例2)

87歳。近くの友人とは毎日お互いの家を行き来して、精神的にも物理的にも活発なつきあいをしている。 ※■印は、単身高齢者(回答者)、直線は、つきあいがあることを示す。

表7. 友人との年齢差

年齢差(歳)	~5	6~10	11~15	16~20	21~25	26~30	30~	不明	合計
人	152	102	65	37	19	8	10	3	396

(複数回答)

つきあいをみると、近所の人と道端で声をかけあったり、互いの家を行き来して、自分で作った花や野菜をあげたり料理やいただきもののおすそ分けをする等、日常的につきあいをしている。8人のうちの2人のつきあいの様子を【図2】【図3】に示す。一方、単身高齢者で別居子とほとんど話をしない人が2人^{注4)}^{注5)}いるが、近所の人と日常のつきあいがされており、それぞれ緊急時には近所の2人、隣の従兄弟を頼れるとしている。また、集落によっては、世話役が安否確認を行っているため、緊急時の対応や支援の広がり期待できる。つまり、単身高齢者の多くが、いざという時にすぐだれかに駆けつけてもらえるといえる。

5-3. 日常のつきあいの内容

5-3-1. つきあいの相手について

つきあいの相手の半数以上が10歳以下の年齢差であり、一方、30歳の年齢差の人とのつきあいもみられる。つきあいの相手数の全体平均値は4.3人である。【表7】【表8】また、相手との間柄で最も多いのは(複数回答)、全体では「近所」(41.1%)である。

いは近所単位でよくなされていることが【表8】からわかる。集落外の人とのつきあいの内容について、つきあいがよくなされている松木場と、ほとんどない魚路の2つの事例は以下のとおりである。

- ① 幹線道路沿いに集落が広がり、近隣集落へのアクセスが容易な松木場では、集落全体のつきあいの相手数84人のうち、集落外のつきあいの相手数が15人でそのうち14人は近隣の集落居住者である。【表1】回答者との間柄は、「以前近所だった」、「親戚」、「同級生」がそれぞれほぼ同数である。
- ② 国道から300~400m入り込んだ所にあり、一部急傾斜地で、他集落に通じる道路のない魚路では、車は集落内の途中までしか入れない。集落外のつきあいの相手数は2人（電話使用）である。

以上のことから、集落外の人とのつきあいは、他集落との隣接状況と関係あるといえる。

5-4. 集落内・外のつきあいの比較

5-4-1. つきあいの相手について

回答者92人中、集落内・外の両方につきあう人をあげた人は34/92人(37%)で、そのうち9人は単身高齢者である。複数回答で集落外の相手数の合計は69人。集落内・外のつきあいの相手の平均数は、各3.5人、2人である。集落外の相手数を集落別に比較すると、市崎木場、松木場、野間池が多い。この3集落は他の4集落と異なり、平坦地と緩勾配地からなる平面的な広がりがあり、隣接した集落がある。

集落外の人との間柄は（複数回答）、「親戚・兄弟姉妹」と「その他」（夫のつきあいの相手、昔同じ職場等）、「以前近所」が多い。集落内では「近所」（48.9%）、「親戚」（31.7%）である。集落により間柄の内容が異なる。市崎木場は野間池とともに「親戚」が多い。

5-4-2. つきあいの内容について

集落外の相手と最もよく行われている行為は、多いほうから順に、「元気が声をかけたり様子を見たり」、「作った野菜や花をあげる」、「相談したり、されたり」である。

集落内との違いは、物理的行為より精神的行為の方がより多く行われていることで、とくに、「料理やいただきもののおすそ分け」（物理的行為）については、集落外の12.3%に対して、集落内は31.4%で差

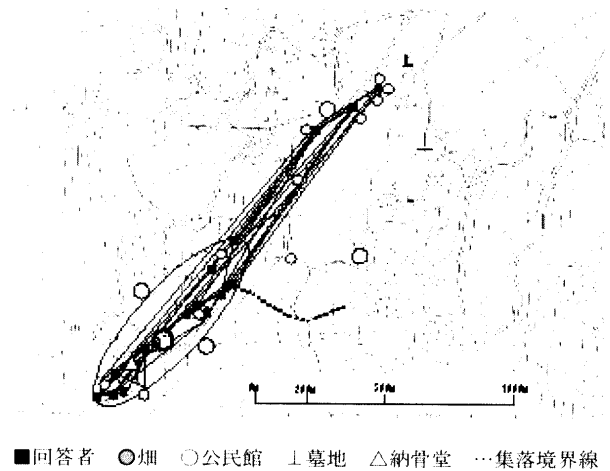


図8. 市崎木場の畑・墓地

が大きい。また、集落外では「元気が声をかけたり、様子を見たり」を「相互に行う」ことが最もよく行われている。つきあいの方法については、全体の有効回答において、ほとんどが「直接会って」行われている。

5-4-3. 集落外のつきあいの相手との距離

つきあいの相手69人のうち42人(60.8%)が1km以上の距離に居住、27人が1km未満の距離に居住。高齢者の徒歩限界は徒歩15分から30分とすると、距離は約1km*⁶⁾ということから、距離1km以上の集落外の相手とのつきあいの関係をみた。結果は以下の通りである。

- ① 1km以上の場合、高齢者だけをみると、健康でも、足が悪い人でも約1200mまでは歩くか自転車で、一週間に1~2回行動している。自立して生活している上に、精神面や物理面でも他の高齢者を支援している実態がみられる。
- ② つきあいの方法と間柄との関係を距離との関係で見ると、1km以上では1km未満より「電話」が多く、特に「以前近所だった」人とは「電話」を使う人が5/7人いる。
- ③ 遠距離であっても、畑に行くついでやお墓参りのついでに寄るといふ事例が多くみられる。【図8】
- ④ 自分が相手宅に行くのか相手が来るのかについては、高齢者宅に来てくれる人は26人で、高齢者自身が行くのは12人、自分が行ったり、相手が来たりは12人、電話だけが8人である。
- ⑤ 単身高齢者の場合は、一人暮らしを心配して相手が自宅に来たり電話をかけてくれると答えて

いる。9人中、7人は、集落外のつきあいの相手は1人であるが、2人は、相手数が3人、4人である。目や耳が不自由な86歳の相手宅に行く87歳の女性は、毎日の墓参りの途中に寄っている。

6. まとめ

同・別居子と高齢者とのかかわりにおいて、同居子がいる高齢者は、別居子から主に物理的な支援を、単身高齢者は、主に精神的な支援を受けていることが明らかになった。しかし、同居子の有無にかかわらず、別居子と話す頻度は高いとはいいがたく、別居子とほとんど話をしない高齢者がいることも明らかになった。

さらに、緊急時に頼れる人として、子どもをあげていても、その居住地が集落外である高齢者が多い。子どもに日常や緊急時に支援を期待できない高齢者が多いといえる。しかしながら、そのような高齢者も、近隣の人と元気か声をかけあったり、車にのせてもらうなどのつきあいをしており、子どもが支援できない部分を地域の日常的なつきあいが補完しており、緊急時の支援にもつながると考えられる。

また、つきあいの内容に、高齢者どうしの支援、複数の人とのつきあいを確認した。精神的なつきあいが最もよく行われており、作った野菜や花をあげるという物理的なつきあいも次によく行われている。一方、集落の地形—平坦地や緩勾配等—によっては、高齢者の日常のつきあいの範囲は徒歩圏を超えて広がりがあっても確認できた。1km以上の遠距離間を行き来する間柄は親戚である場合が最も多く、遠距離でありながらもつきあいがなされていることと深い関係にあると考えられるのは、畑やお墓である。市崎木場をはじめとして、近隣や遠距離の畑や墓地が人々の交流の場となっており、畑や墓地が高齢者のつきあいの重要な要素であることがうかがえる。集落の施設の分散配置が、距離の多少を問わない高齢者のつきあいを促し、生活支援に深い関係があるといえよう。

単身高齢者や後期高齢者が他の属性の人よりしてもらうことが多いことや、子どもができない部分の地域の人々による補完の状況、徒歩圏外であっても畑に行ったり、お墓参りのついでに行われる支援の様子から、高齢者による日常的相互支援のシステム構築の可能性はあるといえる。

謝辞:最後に、調査にご協力いただいた笠沙町の方々、並びに笠沙役場の建設課と住民課の方々に厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 高齢者をとりまくコミュニティの実態』(鹿児島県笠沙町の事例) その3 — 日常の生活行動に関する集落間の比較—, 古川恵子・友清貴和, 日本建築学会大会学術講演梗概集 6037, 2000.9, pp539-540
- 2) 村地域の高齢者福祉を視野に入れた交際関係の分析』, 古川恵子・友清貴和, 農村計画学会論文集 第3集 (農村計画学会誌第20巻別冊), pp145-150, 2001.12
- 3) 『高齢者をとりまくコミュニティの実態』(鹿児島県笠沙町の事例) その4 — 高齢者のつき合いの広がりとお出行動にみる生活支援—, 古川恵子・友清貴和・角征一郎, 日本建築学会九州支部研究報告 第41号, 2002.3
- 4) 80歳・男性—公民館の集まりにはいつも行く。毎日自宅近くの墓参りに行く。そこで近所の人達と会い、元気か声をかけるなどする。
- 5) 88歳・女性—デイサービスに3回/週行くのが楽しみ。通院には近所の仲間が車に乗せていってくれる。野菜を自分でつくっている。公民館の集まりには時々行く。元気か声をかけるのはお互いで行っているが、病院の付き添い、車に乗せてもらう、薬とりはしてもらっている。
- 6) 新建築学体系編集委員会: 新建築学体系18—集落計画—, 彰国社 p.69, 1986.

参考文献・資料

- 1) 齋藤芳徳, 外山義, 鈴木浩: 居住地域における高齢者の外出行動と人的交流に関する考察—在宅高齢者と施設居住者の比較研究—, 日本建築学会計画系論文集, No.532, pp.125-132, 2000.6
- 2) 登張絵夢, 竹宮健司, 上野 淳: 農山村地域にみる高齢者の生活と地域との関係に関する事例的研究, 日本建築学会計画系論文集, No.540, pp.125-132, 2001.2
- 3) 佐久間政広: 山村における高齢者世帯の生活維持と村落社会—宮城県七ヶ宿町Y地区の事例—, 日本村落研究学会, 村落社会研究, Vol.5(2), pp.36-47, 1999
- 4) 金子勇, 『高齢者と地域福祉』, ミネルヴァ書房, 1993.2.15
- 5) 笠沙町役場, 『笠沙町』町勢要覧平成10年度版